

「王様のくれた贈り物？」



「おーい！おーい！みんな来てくれー！」

ある日のこと、「健康村」の住民が足を滑らせ、疾病谷に転がり落ちました。

疾病谷のそばには、健康村の住民をいつも優しくまなざしで見守る医療村の村人（医療者）がいて、転がり落ちた患者さんに寄り添いいたわり手当てをしてくれました。

「どれどれ」、医療村の長老の「隠居さんが、必要な治療を診立ってます。

「そうじゃな、頭やからだは大丈夫そうじゃが、どうやら顎を打って、歯も少し折れておる。ほれ、神経質で、ちょっと融通の効かない奴じゃが、腕は確かな歯医者がおったじゃろ？ふっそ井戸の傍の。早く彼のところに連れて行ってあげなさい。」

健康村の住民が、疾病谷に落つこちたときは、いつもこうして医療村総出の手厚い治療を受けた後、家まで帰るための険しい崖を、時には肩で支えてもらい、時にはおんぶしてもらいながら一緒に登り上がっていくのです。

大変だけれど、医療村の村人は“人の役に立てた”その思いだけで幸せでした。

「歯医者さーん、いる？」

その声に、奥のほうから「おう！」との返事。

「健康村の人が、また疾病谷に落ちたでよう。しこたま顎打って、歯も折れてるようだから、診てやってくれんね。」「じゃあ、すぐ中に入って」

キュイーン、キュイーン、歯に沁みそうな音の飛び交う診察室に通された村人。レントゲン写真を見つめる歯医者さん。

マスク越しに「歯の神経まで折れてる部分が届いてしまってるねえ。保険が効く神経をとる治療にするか、



それとも保険が使えないけど神経を残す方法もある。神経をとったあとは、保険が効く詰め物や被せものにするか、それとも、保険が効かないが見栄えのいい被せものにするか。いろいろあるけど、どうしよう?」

「????え?なに??」そろそろ歯が疼いてきた村人は訳がわかりません。「なにを選べばいいんですか?治療ですか?保険かどうかですか?」

歯医者さんは困っています。この患者さんに、今一番必要だと思っ治療を考えてあげたい。けれど、それを考えれば考えるほど、あるところまでが保険で、そこから保険が使えなかったり、また保険でできたりのジグザグ道になってしまいがち。そうなると、お役人さんから保険分すべて没収とされてしまいます。そのため、保険で済ますなら無理やり一部を端折ったり、こっそり内緒で保険が使えない部分を患者さんをお願いしたり・・・

奥歯に挟まった言葉がどうにもまどろっこしい。
歯切れが悪い理由があるんです・・・

「先生!保険で気にせず、必要な治療が必要なきに選べないのはなぜなんですか!」

患者さんに寄り添ってきた医療村の青年団長が、
空気を察して声を上げました。



「健康村」との交流が始まった頃は、皆で協力しあってました。医療を受けたお礼に、健康村で取れた野菜を贈られたり、医療者を指す子ども達を受け入れたり。断崖を削って作った道もそう。柵などない、石ころがむき出しのそんな九十九折の道が危ないから、村人みんなで安全に造り替えていったのです。もちろん、救える命に限りもあつたけれど、健康村住民の感謝で集まったわずかばかりの【アレバダス】のお金が、どんなに人々の気持ちを豊かにしてくれていたか。

「必要とし、感謝され」細々と守られる命。しかし、もっとたくさんの命を助けたい。

ある時そんな思いで王様が立ち上がりました。王様はまず健康村から医療保険料を集め、そして医療村から買い取った「医療」という現物を届ける仕組みを考えました。「1対1」ではなく、「多数対多数」の仕組みです。

まず王様は、保険料を納めた健康村の住民に《保険証》
を与えました。そして王様は、医療村の住民にも《医療
者》としての資格を与えました。

そんな仕組みが出来上がってくるにつれ、村人たちはい
つ疾病谷に落ちても安心できると喜びました。そして今
までもう助からないとあきらめていた人や、谷に落ちた
恥ずかしさのあまり自力でこっそり健康村に戻っていた
人までみんな、王様に“医療をください”と願うよう
になります。

そうになると、どんどん医療という現物が必要になってきます。

しかし提供できる医療の数にも限界があり、またそれを買う資金にも限りがありました。
初めは村人から集めたわずかな保険料だけで賄っていたものが、すこしづつ足りなくなるに
つれ、保険料は増え、そして年貢まで取り崩すようになってきます。

すると家来たちは自分たちの生活を守るため年貢を使
わせないように、蔵に鍵をかけてしまいました。王様は
焦ってきます。“このままでは、村人たちの必要な医療
も生活も両方が行き詰ってしまう”と。そこで王様は、
みんなに配る医療という現物を制限しようと強権的に
なっています。

強制的に保険料を集めようとする。払えない住民からは
保険証を奪い取る。現物の提供を抑えるために、医療者
に医学とはかけ離れた【保険のルール】を押し付け、一
歩でも踏み外したら全額没収。そして資格を奪い取るぞ
との脅しに、必要な医療すら提供できないよう萎縮させ
ていきました。歯医者さんの奥歯に挟まった物言いの理
由はこのためだったんですね。

必要なときに必要な医療が保険では理不尽な制限の
ために選択できない。





結果、医療者は疲れ果て、
村人達の命の輝きは失われていきました

それから、数年の時間が流れ・・・

あれ？《健康村》の住民も、《医療村》の住民もなんだか生き生き暮らしています。命の輝きが戻ってきています。「必要とし、感謝され」の村人達の営みがまた復活です。なぜかって？王様は気付いたのです。遣り甲斐を失ったり、怪我や病気の苦しみ命の輝きを奪い、そのため国の元気が奪われる。そう【命とは、かけがえない宝物】だと。

村人達も声を上げます。「医療を守ってください。みんなに平等な医療が必要なんです」と。王様は、家来たちに蔵の鍵を開けさせ、「安心」のための医療を守りました。村人達にも、この医療がある大切さが身に沁みましたので、それからは節度を持って接し、この王国すべての人が「医療に対し感謝し、感謝され」の日々を取り戻していきました。

「王様もやっとわかったようじゃのう。さてと、わしもそろそろ隠居できる日が来たわい。」あれあれ？ご隠居さんはそう呟くと、縁側で大きないびきをかきながら、気持ちよさそうに眠ってしまいました。

そして、どんな夢を見るんでしょうね？

2008/07/18

By Sao with team T. S. T.